

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成21年8月5日発行(毎月5日1回発行)  
第49巻8月号(通巻601号)

# 風土



電

神蔵

器

電打つて平らな水の沸騰す

宙を飛ぶ店の自転車雲の峰

太宰忌やさくらの瘤の脂を噴く

生誕百年泰山木は天に咲く

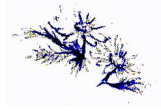
あをあをと竹筆おろす大暑かな

のうぜんや粥噴きこぼす夕厨  
しばらくは掌にあり落し文  
むらさきの念珠の涼や握りしむ  
形代やわが名に祖父の一字継ぐ  
子が過ぎて棺が過ぎて田水沸く  
鎌倉に涼しき風の東門居  
相合の日傘UVカットして



# 竹間集

同人作品



絲蜻蛉

鈴木石花

風薫る江ノ電始発から終点  
白波とサーファー鎌倉高校前  
俵夫の推す豪邸通路えごの花  
人力俵に首夏の鎌倉裏通り  
胸CT検査を明日に卯波立つ  
水琴の甕を新たに絲蜻蛉  
役職の殖ゑし夫に夏来たる

奥多摩むかしみち

山路 紀子

河鹿笛牛馬を呑みし谿覗く  
吊り橋を猿がわらわら青嵐  
庭先の噴井飲ませて貰ひけり  
玄関へ自家用リフト実梅落つ  
柿若葉畳を上げて家を棄つ  
廃屋の物干竿に蛇の衣  
空つぼのボトルを滝に差し出せり

麦の秋

岩木

茂

ひと籠の芽とゆふぐれの山椒の木  
黒揚羽洗礼の名はガラシヤなり  
麦秋の村に墳山七つかな  
早苗田に前方後円墳浮かぶ  
墳山を巡り来し水田に張つて  
くずまんぢゆうつるんと馬頭観世音  
山に囲まれ墓に囲まれ梅は実

向日葵

相沢有理子

夕長し 菜食の 聖金曜日  
隣人と二た言三言朴咲けり  
夏の夜の街ただならぬ呼び子鳴る  
開港祭市民創りし花時計  
名残り雨降らす雷雲迅く流れ  
向日葵剪る乳房ゆさりと妊り女  
筒鳥の間遠に湿布貼り替へぬ

端午

中谷 葉留

もの一つ置かぬ出窓や夏来る  
立体駐車場前なる茅花流しかな  
桜葉降るや 堅穴住居跡  
太竹を渡す馬屋口旧端午  
伸ばしきる巻尺茅花流しかな  
乳母車より嬰を抱き上ぐ若葉風  
終となる同窓会誌柚子の花

遠のさくら

小林 輝子

足萎えてことにも遠のさくらかな  
花巡りめぐりて老いを深うせり  
径一つ隔て羽の国雪椿  
森の風捉ふる白根葵かな  
母の日かと夫がひと言つぶやけり  
しばらくは田植機に従く塩の道  
人探すこゑを通せり青葉山

五月来ぬ

小野寺節子

麦の秋鴉の声に手庇す  
朝な夕山鳩の啼く五月来ぬ  
花は葉に知る人も無き祠かな  
行き返り植田縫ひゆくボランティア  
てのひらで拭ふ手鏡青水無月  
躓いて小石のはねる麦の秋  
田植する夫婦の齢みえがくれ

花 棟

— 浜 福惠 —

佐<sup>さ</sup>分<sup>ぶ</sup>利<sup>り</sup>より届<sup>と</sup>くたよりや苗代菜莢  
此は若州人形浄瑠璃夏芝居  
竹人形一座の幟首夏の門  
再会や開館を待つ木下蔭  
ほたるぶくろにほたるの泊まる話など  
夜光虫汲みて夕子の挽歌とす  
巡礼の道はあふみへ桐の花  
麦熟るる生あたたかき風立ちて  
暮れ六つの空のほてりよ花棟

演目「五番町夕霧楼」

# 山河集

同人作品



神蔵器選

孔子の木一木にして青嵐  
駅を出て神田祭に揉まれけり  
五街道基点のしるべ薄暑かな  
オリンポスの神の系譜や花茨  
花菜漬南部絵暦解きがたく

内藤 静

鎌倉の駅ふくらます遠足子  
はからずもなんぢやもんぢやの花に会ふ  
阿仏尼の墓に供花あり滴れり  
薔薇の名はアブラカダブラ文学館  
海桐咲く海への道の一直線

島田 和子

オペラ座の天井敷敷修司の忌  
新茶汲む明日は手放す稀観本  
春北風や明日判決の靴磨く

豎山 道助

天平の色を染めたる花菜漬  
しがらみのおきにほどけて鉄線花

橋添やよひ

神官の「菖蒲根合せ」立夏かな  
倒立の子が二歩三歩雲の峰  
もてなされゐて風を聴く新茶かな  
懸葵検非違使ゆく男振り

光格天皇遺愛

会ひ得しは「折鶴」の銘杜若

金井 裕子

七半を斜めに立てて麦の秋  
定かには見えねど雨の花樽  
夕若葉指の太きは母ゆずり  
てのひらにころがしてより豆を蒔く  
未完なる交響曲や今年竹

◇特別作品◇(抄)

## 五島列島の初夏

山本 浪子

卯波立つ天平人の越えし海  
空海の風待ちの浦朝曇り  
錯の浮くフェリー大型三尺寝  
かたはらに球児等坐せり昼寝覚  
飛魚をばつたのやうに散らし航く  
飛魚や鋼の尾鰭持ちてこそ  
防人の母の歌碑読む青岬  
白砂を侵せし熔<sup>ら</sup>岩<sup>ば</sup>や浜昼顔  
一樹もて造りし寺や青嵐  
破れ寺の夕鐘六打涼しかり



# 風土独語／神蔵器



孔子の木 一木にして青嵐

内藤 静

孔子の木の天、とあるのは湯島聖堂の構内に入り、仰高門の先二十メートルあたりに大きな孔子の銅像があり、その傍にある楷の大木であろう。

楷の木は孔子の死後、高弟の子貢は六年間の喪に服した。喪が明けると、楷の木の哀杖（喪主の持つ杖）を孔子の墓前に差し、別れを惜しんで泣いた。その涙で杖の楷が芽を吹き、大木に成長し繁殖していったと伝えられている。

わが国に渡来したのは、大正四年、林学博士白澤保美氏が、曲阜（孔子の墓地）から楷の種子を持ち帰り、目黒の農商務省林業試験場で苗に仕立てられた。聖堂の構内では、先に書いた孔子像の傍の楷樹の他に入徳門に一本、杏壇門の前に二木ある。これ等は孔子の墓の曲阜の楷の正子に当る聖木として仰がれ親しまれている。

しかし、俳句にはただ一本「孔子の木一木」でよい。また一木でなければならぬ。

楷樹は幹も枝もまっすぐ生え、葉の姿も整然としている。書道という楷書の語源になっているとおりである。ことに秋の紅葉は美しい。秋の紅葉が美しいということは、春の新緑、夏の青葉

若葉も美しく見事な景観を演出していることである。そして、青嵐は激しく、むしろ爽やかな孔子の生涯を感じさせる。

人にして仁あらずんば 礼をいかんせん  
人にして仁あらずんば 楽をいかんせん

なお、楷の木を孔子の木と命名したのは牧野富太郎博士である。

薔薇の名はアブラカダブラ文学館

畠田 和子

今年の鎌倉での竹の子句会で、私が特選に選んだ二句のうちの一句である。

選者としては失格かも知れないが「アブラカダブラ、アブラカダブラ」と、口の中でつぶやくと、鎌倉文学館の広い前庭の赤・黄、ピンク、白など、何百何千のバラがいつせいに咲き立ち上った。そしてそこに鎌倉文士の一人一人の顔が重なるように見えて来た。川端康成、大佛次郎、芥川龍之介、特に永井東門居先生の温顔、石塚友二さんの「風土は夏夏せして再出発したねえ」などの声もあった。与謝野晶子の

かまくらや御ほとけなれど釋迦牟尼は

晶子

の半折に陶醉したのもこの文学館であった。あの時、何とか晶子の筆跡が欲しくなり探し回って、やっと手に入れたのは、

罪おほき男こらせと肌きよく

晶子

くろ髪ながく作られしわれ  
の短冊であった。

私は「アブラカダブラ」、不思議な語呂のヘブライ語の快い呪文にひっかかったようだ。ただし選句に悔いはない。

# 風土集



## 神蔵 器選

ひと棹で急流に乗る藤の花 上尾 根岸 善行

母の日の大きな空を賜りぬ

風吹きてハンカチの木を探し当つ

散つてくるハンカチの花なりしかな

まどろみもしやつくり疲れ明易し

海へ出て山を見てゐる桜かな 伊東 曽根 治子

朝刊にみどり刷りこむみどりの日

「おくりびと」観て来しよりの日永かな

鬨伽桶に井戸水満たす百合の花

兄弟の背丈違へて二輪草

ちはやふる神の社の遅桜 東京 林 いづみ

一輪づつ薔薇手渡さるコンサート

水張つて棚田大きくなりけり

早苗田の点景となる翁かな

一停止してくちなはの登りゆく

近道は桐咲く峠与謝郡 綾部 河北美智子

目印は往きも帰りも桐の花

縛れ解く風を待ちたる藤の房

代掻きの前や後や鴉どち

粽食む白寿の母のおちよぼ口

遠足の声ころがして丸太橋 盛岡 石崎 浄

貞任の駆けし街道田螺鳴く

風の子を隠し母衣振る熊谷草

紫衣僧の絵巻のごとき七変化

散り際は太刀一振ぞ紅椿

一山の闇知り尽す臺 静岡 菅原 末野

葉ざくらの風や大路の車夫溜り

夏木立風集めては放ちけり

老鶯や一雲も無き古戦場

万緑や楼に撞木の括られて